

● ● ● ● 継承と展開

これまでに述べてきたように、本事業はほとんど当初の計画どおりに進行し、幾多の成果をあげることができた。その結果あらたに生まれた最大の課題はこれら成果の発展的な継承であろう。この点、本事業では事業期間終了後の継続を念頭において実施してきたため、この課題に取り組んでいくにあたって大きな壁は存在していない。そこで、この最後の章では単なる継承ではなく発展的継承という観点からあらためて本事業の3本柱に沿ってその展開方向例のいくつかを提示する。

4-1 カラーコードベンチマークの継承と展開

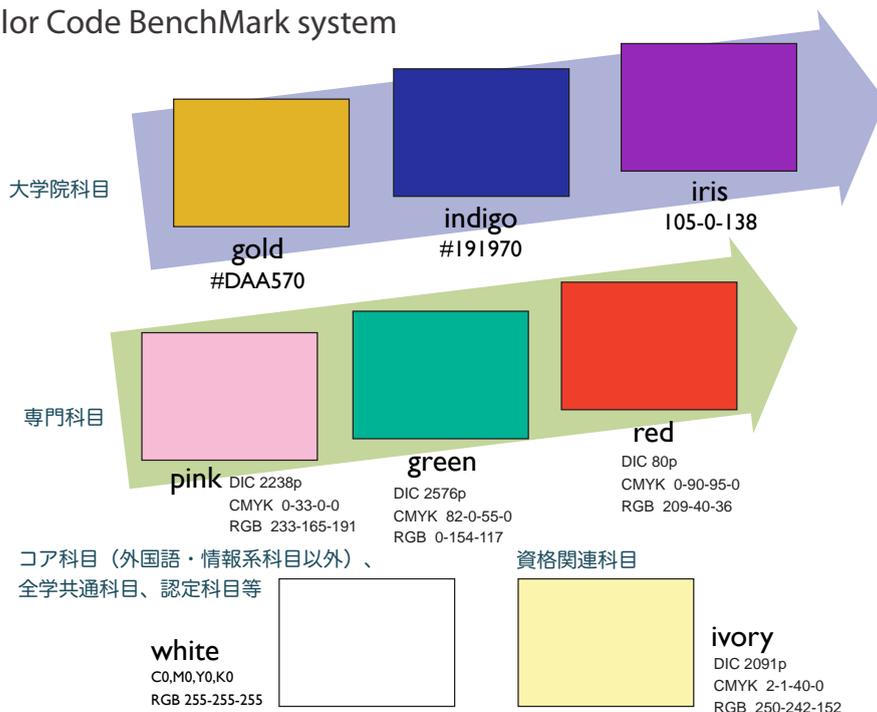
カラーコードベンチマークの体系は2-2 (1) (3) の成果のまとめに示したように、本学の学士課程を構成しているすべての授業科目に適用され、2011年度から運用された。この体系は同時に実施された複数プログラム選択履修制度における学生の学修計画立案に大いにその役割を発揮することが期待される。同履修制度は学年進行で適用されるためこれから数年先にかけてこの体系の有効性が増していくことになろう。カラーコードベンチマークの構成内容は成果2-2 (3) に示したように、すでに初発段階において比較的バランスのとれた状態に至れた。だが当然、今後、実際の授業運営のなかで調整、変更の繰り返しがあって全体の体系は一層安定化していくだろう。

その過程でこの体系は大きく2つの点で拡張される余地を残している。ひとつは大学院での授業科目におけるカラーコードベンチマークの適用とそれともなうカリキュラムの再体系化である。本学に限らず大学院においては授業の実質化が大きな教育改革課題になっている、明確なコースウェアとしての授業の体系化、あるいは学部における先取り履修、柔軟な大学間連携によるディグリーの拡張などの局面において、カラーコードベンチマークは有効な指針としてその機能を拡張的に発揮していくことになるはずである。

すでにこの大学院科目への適用については大まかに博士前期課程において2種、後期課程においてその課程科目であることを示す1種のカラーコードを付すモデル(下図)を用意してある。

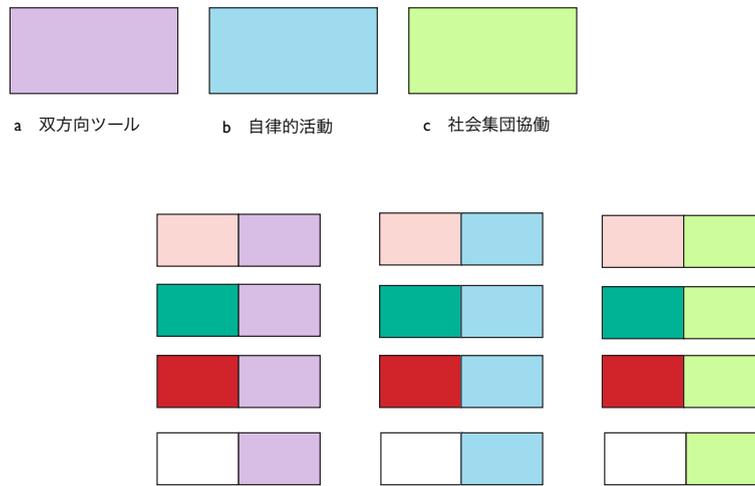
カラーコードベンチマークシステムのもうひとつの拡張展開の方向性は、複数プログラム選択履修制

Color Code BenchMark system



度とともに多次元的な学士力養成の一翼を担うものとしてある就業力育成プログラムの質的内容を明示するコンピテンシーカラーコード（CCC）の併用である。すでに本学では就業力育成支援のために「双方向性ツールの活用」「自律的活動の促進」「多様な社会集団のなかでの協働」という3つの特性におけるコンピテンシー開発と育成を授業目標のひとつに掲げる授業科目を認定し、学士課程カリキュラムに組み込んで実施している。そこでそれらが育成のポイントにしているコンピテンシーを3つのカラーコード（下図）で明示し、これをカラーコードベンチマークとともに併記することで就業力育成を図る授業科目の学修計画の一助にするとともに、そうした能力開発に関するわかりやすい学修証明（下図）にも用いていける仕組みを準備している。

Competency Color Code --- CCC with CCBM



コンピテンシーカラーコード

①表面

成績証明書

文教育学部 言語文化学科（日文）
0410101 お茶の水 花子

入学年月

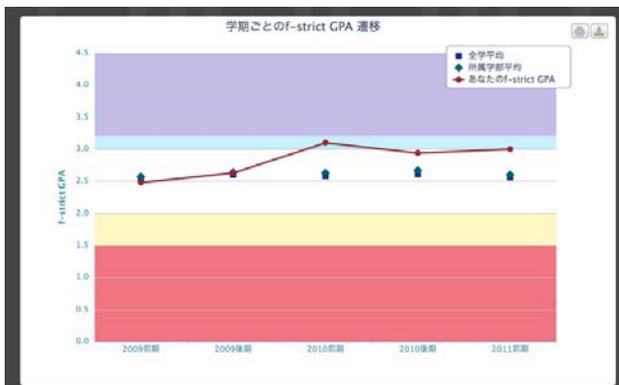
生年月日 平成元年1月1日生

授業科目	CC BM	CC C	単位	評価		年度	授業科目	CC BM	CC C	単位	評価		年度
				LG	GP						LG	GP	
【文理融合リベラルアーツ】													
色・音・香6 色・音・香と生活文化			2	A	3.22	04	日本古典文学論演習（近世）II			2	A	3.22	06
色・音・香7 舞踊における色・音・香			2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（近代）I			2	A	3.22	06
色・音・香8 宗教と色・音・香			2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（近代）II			2	A	3.22	06
色・音・香9 おいしさと色・音・香			2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（現代）I			2	A	3.22	06
色・音・香10 知覚認知と環境デザイン			2	A	3.22	04	日本近代文学論演習（現代）II			2	A	3.22	06
ことばと世界4 文化の記号学			2	A	3.22	04	日本語学演習 I			2	A	3.22	06
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -			12		3.22		日本語学演習 II			2	A	2.22	06
【情報】							日本語学研究指導			2	A	3.22	06
情報処理演習			2	A	3.22	04	日本文学研究指導			2	A	3.22	06
- 単位数小計と上記科目区分のGPA -			2		3.22		異言語文化受容論			2	A	3.22	07
【外国語】							日本古典文学史論（上代）			2	A	3.22	04
基礎英語 I			2	A	3.22	04	日本古典文学史論（中古）			2	A	3.22	05
基礎英語 II			2	A	3.22	04	日本古典文学史論（中世）			2	A	3.22	05
総合英語 I			2	A	3.22	04	日本古典文学史論（近代）			2	A	3.22	05
中級英語 I			2	A	3.22	05	日本近代文学史論（近代）			2	A	3.22	05
中級英語 II			2	A	3.22	05	日本近代文学史論（現代）			2	A	3.22	06
フランス語初級（文法）I			2	A	3.22	05	日本近代文学論特殊研究（近代）			2	A	3.22	06
フランス語初級（文法）II			2	A	3.22	05	日本近代文学論特殊研究（現代）			2	A	3.22	06
フランス語初級（演習）I			2	A	3.22	05	日本語学特殊講義 I			2	A	3.22	06
フランス語初級（演習）II			2	A	3.22	05	日本語学特殊講義 II			2	A	3.22	06
			2	A	3.22	05	日本古典文学論特殊講義 I			2	A	3.22	06
			2	A	3.22	05	日本古典文学論特殊講義 II			2	A	3.33	07

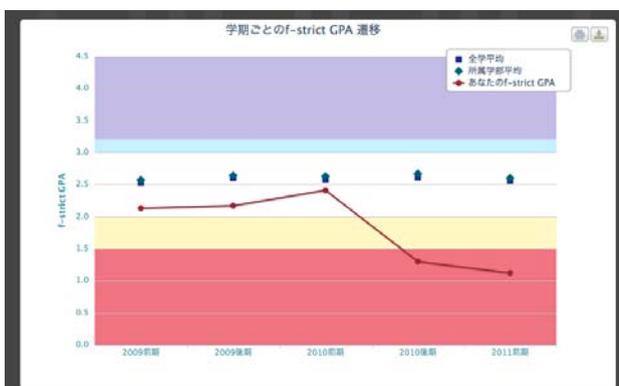
4-2 fGPA の継承と展開

成績評価指標に導入した functional GPA は 2-2 (2) (4) ~ (7) の成果のまとめに示したように、柔軟かつ厳格厳正な成績評価を適正に映し出す成績指標としての有効性を発揮し始めている。その典型は概括的な指標であるレターグレードにおいて全学的に A 評価の過多という問題性が表面化していたことについて、これをあらためて素点評価を反映したグレードポイントで仔細に見直してみると、その内実は A 評価のなかでも B 評価に近い評価ほど割合が増大し、S 評価に近い方向ほど大きく減少している事実をとらえることができた。これは本学の成績評価の実際が評価分布としてわずかながら評価が高い方向にあるものの、全体の評価バランスとしては妥当な評価がなされている事実を示すもので、レターグレードにあらわれる偏りはカテゴリー化による丸めの影響を映し出したアーティファクトであると結論できる結果であった。

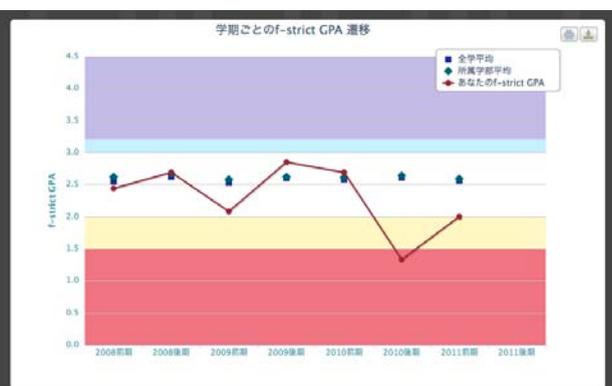
この事実にみるように functional GPA は教員の評価行為を適正に表現するうえで威力を発揮する。むしろ同様にこの指標が学生の学修状況を判断するうえでも有用であることはいうまでもない。学修支援には学生の主体的な学修行動を促進する上でのサポートとしてそのための情報提供や相談がある。だが、多様化した学生を相手にしている現代の大学環境にあってはそうしたいわばパッシブなサポートとともに、アクティブなサポートも重要な活動になる。たとえば、下図は GPA 制度を導入する以前の本学の在学生についても参考までに fGPA の算定をして、その学期ごとのパフォーマンス推移をみたなか



【1】 GPA の学期推移で高い学修成果を維持している例、グラフ中のドットは学内平均をあらわしている



【2】 GPA の学期推移で学修成果が落ち込んでいる例



【3】 GPA の学期推移で学修成果が落ち込んでいる例

からピックアップした例である。【1】にみるように初年次において学年平均の学修成果を示しながら、その後、それを上回る高い学修成果を出している例であれば、いうまでもなく学生の主体的な学修に任せることができ、複数プログラム選択履修で主プログラムを学修したのち本人が強化プログラムの履修を望むなら、その選択は至当なものとなるだろう。

他方、たとえば【2】や【3】のように学修が進むにつれて高学年次に向けて学修成果に大きな落ち込みを示しているような例では、まさに多肢的な学修選択が可能となった環境では、できるだけ本人の学修成果が上がり、満足できるような履修と学修の計画が柔軟に立てられて然るべきであろう。無理な選択をして十分に学び修めた実感がもてないような事態は学修成果のモニターによって積極的に回避できる。むしろ【3】のように最終学年に達してからの調整は困難だが、【2】にみるように2年生後期の学修においてすでにレッドゾーンに入った学生はアクティブセーフティとしての学修サポートがとられてしかるべきだろう。これまではこうした細かな学修モニターの術がなかったため、このような状態になっている学生は放置されていたわけだが、これからは適正に測られた評価データをもとに少なくとも大学側からノーアクションのままであるということはなくすることができる。

また、この高機能 GPA はとくに学修意欲の高い学生に施される特別強化プログラム（たとえば、理数系で実施されるアドバンスト・プログラム）などでの効果測定にも能動的な意義をもって活用できる。それは単に事後的な測定の意味だけでなく、GPA 指標をもとに効果が測定されるという事実が事前に了解されることによって学生と教員の双方にとってこのプログラムにおける学修動機づけが促進されるという効果を指している。それは信頼性の高い評価指標の存在が教育の質の向上に寄与していく方途を切り開く例となっていくだろう。

さらに fGPA はあとに述べる alagin システムのなかで多様な分析の基盤データとなり、多様な入試方法と学修成果との相関分析や効果測定、卒業後の進路と学修成果の関係についての分析、学士課程での学修成果と大学院での学修成果との相関分析など教育成果に関するエビデンスベースでの測定と予測の方途を大きく開くものとなる。さらにこれらを IR 活動に展開することで本学における教育の質保証の実際を社会に適切に提示していくことができることになる。

4-3 総合学修支援の継承と展開

本報告書の2-2では(10)(11)において総合学修支援センター、(12)において授業・学習支援システム moodle と plone、(13)(14)において学修支援情報システム alagin について、それぞれの状況と成果をまとめた。センターにおける対面サービスと情報システムによるユビキュタス・サービスによって、24時間、どこにいても本学の学生はしかるべき学修支援を受けることができる基本的な体制が整備された。今後はサービスの実施によってあきらかになる改善点に対処していくことによってその充実化を図ることになる。

3-1に示した学修支援(システム)についての在学生アンケート調査によって、学生は学修相談の相手としてピアサポートを最も重視していることがわかった。複数プログラム選択履修制度ではプログラム選択において各学部・学科のコースや講座における学修指導担当教員が中心的な役割を担う。したがって、プログラム選択において学生はその窓口を頼りにすることになるが、一般的な学修の相談先として学生が求めているのは教職員よりも同じ学生や先輩のピアサポートであるという事実から総合学修支援センターはこの先もその役割と意義を十分に満たす方向に展開していくことになろう。

つぎに、現在、本学の授業・学習支援システムには moodle と plone という2つのシステムが稼働している。3-1に示した在学生アンケート調査の結果ではこれらに対してそれなりの認知率を確認したが、全学生の認知と利用にいたるまでにはこれらを活用する授業の量とも相まって今後の広報展開の課題になっている。その利用が全般化するには広報のみならず、両システムのユーザビリティの一層の向上が不可欠であり、それに対する学生からの求めもアンケートによってあきらかになっているので、今後の継承と展開ではこれらの改善が図られていくことになる。すでにその第一弾としてこのあとに述べる alagin システムへの学生の入口が自身の履修した授業科目の時間割一覧になり、moodle や plone を用いている授業の場合はその時間割から直接同システムにリンクするよう整備したので、利用に際しての手順負荷は相当軽減されることになる。

第3に学修支援情報システム alagin はこれから本格的に稼働することになるが、これについては将来的に2つの方向で展望することができる。ひとつは学期ごとに学修成果にもとづく学修計画(アカデミック・プランニング)を方略的に立案し、みずからの学士力養成の最適化を図るための基盤ツールとしての機能を開発し拡張することがあげられる。

この方略的立案とは、事実データとしてのパフォーマンス成果(学士課程の中間過程における継時的なアウトカムズ)に立脚して、最適な学修ナビゲーションをPDCAサイクルのように調整計画的に策定し、それぞれの個人のベストパフォーマンスを得ていく行為を指している。これは大学や学部からの視点で提示する履修範型だけでなく、個々の学生の遂行状況にそくして履修計画を設計し、できるだけ良好に、満足度高く学修していく手立てとなる。これはむろん多次元的な学士力養成や学生主体の新しい学士課程の創成という本学が掲げる教育改革プロジェクトとその課題のもとで、学部・学科を越えてまとまりのある学修を可能にしていく複数プログラム選択履修制度を実効性高く運用していくうえで必要な役割を果たすことになる。

学生主体の学修を促すとしても、単に学生の希望や理想、あるいは学部や学科、コース、講座の方針にもとづき履修計画を立てていくのならば、従前どおりの方法で事足りるであろう。しかし、それでは十分な学修成果があげられない学生も少なからず存在する。そうしたなかで学生主体の多様な学修を促進するとすれば、個々の学生の学修遂行状況に応じた最適なアカデミック・プランニングの策定が不可欠になる。そのプランニングは学修目標の達成が満たされて達成動機や満足感が充足されるかたちで、いわばプラグマティックに立てられていく必要がある。事実ベースの成果をチェックしながら、現実的に個々の学生のベストパフォーマンスが得られるように履修・学修航行の道筋を選んでいくことは結果的にそれぞれの学生のアカデミック・パフォーマンス・ポートフォリオを構成する学士力配分についての質的な性状を決め、その全体において量的に最大限の成果をもたらすことを可能にしていくことにつながる。

学生の多様化、社会の構成や価値観、キャリア形成の多様化に対応して、多次元的な学士力養成を引き受けようとするとき、これを大学がもつ教学内容資源全体をもって受容し、そのうえで学生個々の視座に立ったアカデミック・パフォーマンス・ポートフォリオを適切に形成していくことができれば、これまでの大学にはおよそ経験知のなかったこのあらたな課題にも十分処していくことができるだろう。それを現実のものとするために教学の普段の営みのなかで当たり前におこなってきた学修成果の評価情報を十二分に活かして個々の学生の学修成果を的確にモニターしていける情報システムと、その読み込みと計画立案につながる案内・相談・支援体制を充実させる総合策が必要になる。そこにおいて alagin は個々の学生の最適学修航行を支える基盤システムとして、これまでの大学環境にはみられなかった効能を発揮していくことになる。

学修支援情報システムのもうひとつの展開方向はこの利用価値の高いシステムを基本的にオープンソースとして公開し、この仕組みを他大学でも利用可能なようにセミパッケージ化していくことである。これは大学間連携による教学システムの協働運用をおこなうことで、教育改革に少ない投資で目にみえる大きな効果をあげていく方策としてそのひとつの範型を提起していくことになる。教務システムは扱うデータの性質上、クラウドシステムには馴染まないが、独立したサーバーで自主開発した alagin にはオープンソース化し、これを協働運用、共同開発のかたちで拡張、発展させていく道が開かれている。国の高等教育改革に向けるあらたな施策の方針との兼ね合いもあるが、それとの相性さえよければ、まさに本事業を継承し発展させる新事業としてそうした大学間連携事業へもつなげていくことができるだろう。